

いつもありがとう

第11回作文コンクール 入賞作品集 2017

〈選者〉あさのあつこ／森田正光／小島奈津子／崎村忠士／別府薫



シナネングループって何の会社？

私たちの生活のとなりに、
シナネングループがいます

「いつもありがとう」作文コンクールを主催しているシナネングループが、どんな仕事をしているのかわかりますか。実は、シナネングループの扱っている様々な製品は、私たちの生活のなかで、なくてはならないものとして役立っています。生活のそばに、シナネングループを紹介します。



「いつもありがとう」作文コンクール共催企業

[シナネンホールディングスグループ]
シナネンホールディングス ミライフ西日本 ミライフ
ミライフ東日本 日高都市ガス シナネン シナネンサイクル
品川開発 シナネンゼオミック ミノス タカラビルメン
インデス ユテックス シナネンファシリティーズ

シナネンホールディングス株式会社 東京都港区海岸一丁目4番22号



ありがとう 作文

第11回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集(2017) もくじ

先生方のお言葉……………3

あさのあつこ(作家)

森田 正光(氣象予報士)

小島 奈津子(フリーアナウンサー)

崎村 忠士(シナネンホールディングス株式会社)

別府 薫(朝日小学生新聞)

最優秀賞

「かみなりおかあさん」

富澤 晃士朗 …… 4

シナネン賞

「ありがとう」その先に

鈴木 絢乃 …… 6

ミライフ賞

「母さんのお弁当箱」

植木 涼太 …… 8

朝日小学生新聞賞

お父さんの手

野村 歩夢 …… 10

優秀賞

〈低学年の部3編〉

おとうとへのかんじやのきもち

畑中 俐人 …… 12

小さなかいじゅうとようせい

庭野 心暖 …… 14

がんばってね、おかあさん

里 賢信 …… 16

〈高学年の部3編〉

ぼくの優しいじいじ

大栗 世風 …… 18

負けるな姉ちゃん

平田 つぶら …… 20

お母さんと歩いた道のり、歩く道のり

橋本 美咲 …… 22

団体賞(8団体)

【福島県】 鏡石町立第一小学校

【群馬県】 太田市立生品小学校

【愛知県】 扶桑町立柏森小学校

【愛知県】 扶桑町立扶桑東小学校

【大阪府】 大阪市立島屋小学校

【兵庫県】 洲本市立安乎小学校

【広島県】 福山市立金江小学校

【鹿児島県】 中種子町立星原小学校

主催…朝日小学生新聞社

共催…シナネンホールディングスグループ

後援…文部科学省 朝日新聞社

●応募総数三九、六九九作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさのあつこ 「作家」

いつもありがとうという作文コンクールを審査するたび毎年同じことを思います。自分にみなさんの作文を審査する資格があるのか? 毎回、毎回、自分が試されているような気がします。みなさんの作品を読むと、人間として、大人として、母親としての原点に立ち返ることができます。今回はおじいちゃん、おばあちゃんをテーマにした作文が多く、すごく楽しかったです。本当に美しく、わかりやすい文章ってこういうものなのか考えさせられました。

森田 正光 「氣象予報士」

毎回の作品も素晴らしく、甲乙つけがたいので、僕は自分の会社の若い社員にもみなさんの作文を読んでもらっています。例年は社員の間で意見が分かれることが多いのですが、今年ほとんど部分で社員の意見が一致しました。自分の審査結果を若い社員の審査結果と比べてみると、これもかなりの部分で一致していたので、いい作品は世代が違っててもいい作品なんだと実感しました。

小島 奈津子 「フリーアナウンサー」

審査はつらくもあり、(また素敵な作文が読めるので)うれしくもあります。作文にはいろいろなお母さんが登場します。「娘のことを心配する、口うるさいおかあさん」など、読んでいてついつい自分とオーバーラップしてしまいます。これってうちのことじゃないの、どこの家庭も同じなのねと思わずにはいられませんでした。言葉にしないで

も分かり合える親子関係のことを文章にしている作文が多かったのが印象的でした。ありがとうの気持ち伝わってきました。

崎村 忠士 「シナネンホールディングス株式会社」

今回もいい作品が多く、審査には本当に苦労しました。あたりまえのこと、何げない1日のこと、送り迎えのこと、客観的に見た保護者のことでここまで深い文章が書けることに驚き、感動しました。今年もすばらしい。ありがとう、が、たくさん全国から届きました。取り組んでいたいた児童や保護者、先生方に感謝いたします。みなさんの作品を多くの人に読んでもらい、ありがとうの輪を広げていきたいです。

別府 薫 「朝日小学生新聞」

世の中にはいいことだけが書かれている作文もあります。が、このコンクールには、「いい子じゃない自分」ともじっくり向き合って文章にしている作文が多いと感じました。そうやって生まれた「ありがとう」だからこそ、読む人の心を打つのだと思います。子どものころは、毎日が永遠に続くようにも思えますが、実はあつこという間に過ぎてしまっています。このようにすてきな作文は、ご家族にとつても自分にとつても、思い出をとどめる宝物になるのではないのでしょうか。今回初めて審査に参加しましたが、貴重な機会を与えていただきました。

(順不同敬称略)

「かみなりおかあさん」

富澤 晃士朗

ぼくは、三人かぞくです。せがたかくて、いままでおこったことがない、おとうさん。まい日、「いそがしい。いそがしい。」

と、いそいでいる、おかあさん。今日は、おかあさんについて、書きます。

おかあさんのしごとは、先生です。しごとでは、やさしい先生だとぼくに、おしえてくれました。でも、ないしょの話です。おかあさんは、まい日、ぼくをたくさんしかります。だから、しごとでも、こわい先生だとぼくは、うたがっています。朝六時、「もつとていねいにひきなさい。」朝ごはんの前から、おかあさんは、しかっています。ぼくは、まい朝、ピアノのれんしゅうをしています。

学校からまずかえつてくると、しゆくだいのほかに、ドリルを、四まいやります。しごとからかえつてきたおかあさんは、つぎの日の、ごはんの、下ごしらえをしながらかみなりを、たくさんおとします。「ていねいな字でかきなさい。」ゆつくり、考えれば、ましがえないでしょ。「ごはんの時間です。」左手でささえなさい。やさいもしつかりたべなさい。すきなものだけたべてはだめよ。」

まい日まい日、おかあさんかみなりがおちるので、ぼくは、六月の土曜日、かみなりがおちる前にいえを出ることにしました。いきさは、そうぞうのもり、ザリガニをとることにしました。ザリガニがつれたらもちろん、いえにかえることにしました。ザリガニが、とれませんでした。かえり道いきさを言わないで、出かけたことを、おかあさんはとてもおこるんだろうな、どんな、大きなかみなりがおちるんだろうと、ドキドキしていました。いえの前の、こうえんにつくと、おかあさんが、いました。「うわっかみなりがおちる。」と、思ったしゅんかん、おかあさんは、ぼくを、だきしめながら、「こうちゃん。」と言いながらないでいました。おかあさんのなみだを見ると、なぜか、ぼくの目からなみだがあふれてきました。「ごめんなさい。」ぼくはなきながら、かつてに出かけたことをあやまりました。おかあさんは、なきながら、ぼくのあたまと、ほっぺと、かたを、さわりました。そしてこう言いました。「こうちゃんがにげたくなるほど、しかつてごめんね。」「こうちゃんは、たからもの。だいじ。たいせつだから、もうかつてに出かけたりしないで。」「ぼくはなきながら、何かいもうなずきました。今日も、ぼくはしかられています。でも、おかあさんのかみなりは、たからものほくにしか、おちないのです。だから、ぼくは、かみなりをたくさんうけて、いつかおかあさんみたいに、自分の子どもも、あたたかいかみなりをおとしたいです。

おかあさん、いつも、しかつてくれて、ありがとう。やさしいおかあさんもすきだけど、かみなりおかあさんもだいすきです。

評価のポイント

起承転結があり、物語としても通用する。母と子の絆をえがけている。

「ありがとう」その先に

鈴木 絢乃

私には姉がいます。

勉強運動が得意で、明るく元気な人気者。ケンカもしますが、自慢の姉です。

そんな姉に事件が起こりました。

突然の足の痛みと高熱により、きん急入院になったのです。

股関節の病気であった姉は、二度の手術をしましたが、回復することはなく、姉はもちろん、私たち家族にとつて、辛く苦しい日々が始まったのです。

「大丈夫。絶対治るから、自分を信じて。」
病室で、母といっしょに泣いている姉を見たとき、胸がしめつけられる思いでした。

いつも一緒に歩いていた学校への道。

一人で歩くと、長く感じ、姉が走ってくる気がして何度もうり返りながら歩きました。

姉の友達から病気のことを聞かれるたび、笑顔で答えましたが、本当は涙をがまんしている、そんな日が続きました。

ある日の病室でのこと。両親が担当医師に呼ばれ、私と姉は、学校での出来事や、友達のことを笑いながら話していました。

笑いが止まったとき、姉が真剣な顔で、

「あや。私ね、もう歩けないかもしれない。」

びつくりしましたが、私はとつさに、

「歩けなくてもいいじゃん。」

「どうして！ 車いすが無いと動けない姉ちゃんなんてはずかしいでしょ！」

姉は、大粒の涙を落としながらも私の目をグッと見つめ、私の言葉を待っていました。

「姉ちゃんがいらないのはさみしいよ。車いすでもいい、居てくれるだけでいいから。」

私と姉との間に不思議な空気が流れ、どれくらいの時がたったのか、両親が戻ってきました。母はその場の空気を察したのか、私たちに姉のクラスみんなからの手紙を見せ、また笑いながら、姉との時間を過ごしました。

翌日、姉は大学病院へ転院しました。

大学病院での姉の病室は、両親以外は面会禁止で、私が姉に会うことはできません。そんな中、手術後の姉が一行の手紙を書いてくれました。

「あやへ、たくさん泣こう。そしたらおもしろい笑おうね。今まで本当にありがとう。精一杯の感謝を送ります。」

普段、痛みや苦しきを見せない姉が、懸命に書いた文字と言葉に涙が止まりませんでした。

あれから間もなく二年。病気を乗り越え、受験にも合格し、電車で元気に中学校へ通う姉。元気に走る後ろ姿は、歩けなくなる病気であったことなど感じさせない、以前の力強い背中です。悲しみや苦しみに勝ち、さらに強くなった姉は、自慢の姉から、私の目指す目標に変わっていました。

私達が姉妹という当たり前の中に感謝があることや、病気に打ち勝つ心の強さを教えてくれてありがとう。そしていつの日か、お姉ちゃんの背中、乗り越えてみせるから！

評価のポイント

高い文章力と、お姉さんのその後が気になり、一気に読ませる作品。

「母さんのお弁当箱」

植木 涼太

ぼくは、パンとごはんのどちら派かというところ、ごはん派だ。父があまりパンを好まないため、必然とごはんが食卓に並ぶせいもある。そんな両親の古風な考えはお弁当にも反映されていて、運動会、遠足にはザ・お弁当と言える定番メニューが入っています。ウインナーに玉子焼き、からあげ、サケのおにぎりなど。

毎回毎回同じメニューなのでぼくは母に、

「はずかしいよ。一度でいいからキャラ弁作ってよ。」

と言いました。周りの友達の花やかなお弁当がうらやましかったのです。サンドイッチのロール巻き、焼きそばをアレンジした物など、見たこともないメニューが本当にまぶしかったのです。母はそんなぼくに悪いと思っただのか、次の行事からキャラクターらしきおにぎりをお弁当箱に入れてくれました。ここから母の「ゾンビ弁当」が始まりました。そのキャラクターらしきおにぎりは、きつと初めは上手に出来ていたのかもしれないけれど、しかし、ぼくは登校に数十分間歩かなくてはいけない。なんい度の高いキャラ弁は母にとって、きつとつめ方のわからない物だったでしょう。パカッとフタを開けた時には、

「ギャー!!!」

と声が出そうなほど大変なことになっているのです。パンダらしきおにぎりの目がどこかにいってたり、時にはケチャップで出来た口が口さけになっていたり、本当にひどいじょうたいです。最初は急いで作っているのかな、時間がないのかなと思っていました。友達に見せるのもはずかしいとも言いたいくらいでした。でも、夜中に明日の行事が楽しみで目が覚めた日にその気持ちはなくなりました。こっそり明かりのついた台所をのぞくと、のりを切ったりしてレシピ本をのぞくがんばる母の後ろすがたがありました。小さな弟妹のお世話でくたくたのはずなのに、決して器用とは言えない手でがんばっていました。ぼくはこの後ろすがたを一生忘れないでしょう。

ぼくはそれから母の作る「ゾンビ弁当」が楽しみになりました。目が左右曲がっていても、口がどこかになくなってしまっても、ぼくのお弁当箱の中には愛情がいつぱいつまっています。ぼくの苦手な食べ物も入っていたりするけれど、それも栄養を考えなくてれたやさしさと気づきました。

空っぽのお弁当箱は、

「母さん、おいしかったよ、いつもありがとう。」

のほくからの気持ち。そう、母さんのゾンビ弁当が日本一！ いや世界一大好きだ！

お父さんの手

野村 歩夢

「おれの手きたないから、代わりにしはらいして。」

と、言いながらお父さんは、いつもお母さんや、ぼくにさいふをわたしてきました。ぼくは、お手伝いが出来るので、たのまれたら、うれしい気持ちになります。

でも、お母さんは、

「仕事をがんばってついたよこれなんだし、洗っても落ちないんだから、相手の方によこれがつることはないし、気にしないで自分ではらいなよ。」

と、言います。それでもお父さんは、自分ではらわないので、お母さんがはらいます。その時のお母さんの顔は、おこっているような、かなしんでいるような顔をしています。たまに、この事が原いんで、けんかになる時もあります。けんかをした時に、お母さんに、

「大じょうぶ？ 何でお父さんは、あんなにいやがるのかな。」

と、ぼくは聞いてみました。

すると、お母さんが、

「むかし、お父さんがコンビニで、お金をはらおうとした時に、店員さんがお父さんのよこれた手を見て、とてもいやそうな顔をして、お父さんの手にふれないように、お金を受け取られたことがあって、それからお父さんは、気にして自分で、はらわなくなっただよ。」

と、教えてくれました。ぼくは、お父さんの手のよこれを、一回もきたないと思った事がなかつ

たので、この話を聞いて、むねの中が「キュー」となって、とてもかなしくなりました。ぼくが元気をなくしていると、

「お母さんは、お父さんの手のよこれを、一回もきたないと思った事はないよ。あのよこれは、家族のために一生けん命はたらいて、がんばって仕事をしているあかしだと思う。」

と、お母さんが言いました。ぼくは、お母さんがぼくと同じ気持ちだったので、ホツとして、うれしい気持ちになりました。

ある日、ぼくはお父さんに、

「なんで手がよこれるのに、手ぶくろをして、作業をしないの？。」

と、聞きました。お父さんはぼくの目を見て、

「重要な所を作業する時は、手ぶくろをしていると、細かい作業がしにくいし、す手の方が、感か

くがたしかだからだよ。」

と、話してくれました。

ぼくのお父さんは、車屋の自えい業をしています。いそがしい時は、朝ぼくが起きる前に出社して、ぼくがねた後に帰ってくるので会えない日もあります。とても車が大好きで、車の事を何でも知っていて、ぼくにたくさん車の事を教えてくれます。お客さんの故しうも、すぐになおしてしまふ所は、とてもすぐくてカッコイイです。そんなお父さんの、何でもできる手が、ぼくは大好きです。

お父さんといつもいっしょに、がんばってくれるお父さんの手、本当にありがとう。

評価のポイント

働くことの大切さ、誇り、家族への愛情・感謝の気持ちの大切さを教えてくれる。

おとうとへのかんしやのきもち

畑中 俐人
はたなか りひと

けんちゃん、生まれてきてくれてありがとう。だって、けんちゃんが生まれたから、ぼくおにいちゃんになれたんだよ。ぼく四さいまで一人っ子だったんだ。おにいちゃんになれてうれしかったよ。

けんちゃんはしらないとおもうけど、おかあさんのおなかのなかにいるとき、ぼくおなかにちゅうしたり、ほんをよんであげたり、おにいちゃんになるれんしゅうをしてたんだよ。おなかのなかできいてくれた？

けんちゃん、いつも「あそぼー」っていつてくれてありがとう。でも、ぼくがやらなきゃいけないことをやっているときはダメだよ。ぼくね、けんちゃんとあそぶとたのしいんだよ。けんちゃんがたくさんわらつてくれて、ぼくもわらいたくなって、わらいすぎておなかいなくなるけど、二人で大わらいするのすごくたのしいんだー！ ときどきケンカもするけど、すぐに「ゴメンネー」「いいよー」っていつてぎゅーしてなかなかおりだもんね。

けんちゃん、ぼくがいたがっているとき、「だいじょうぶー」っていつてくれてありがとう。けんちゃんのことばでいたいのどこかにいつちやうんだよ。けんちゃんがどこかいたいときは「だいじょうぶ？」っていつて「ふーふー」してあげるね。そしたらけん

ちゃんもいたいのどこかにいつちやうもんね。

けんちゃん、「ほしいもたべたいー」っていつてくれてありがとう。だって、ぼくもお休みの日のおひるにたべたいからね。だからありがとうなんだよ、けんちゃん。

けんちゃん、らいねんからようちえんだね。いっばいおはなしができるようにおしえてあげるね。わからないべんきようがあったらおしえてあげるね。ぼくおにいちゃんだからさ。おそろいのつくえといすでおべんきようしようね。いまから、すぐたのしみだね。

けんちゃん、このごろいろんなことおほえて、一人でできるようになってうれいな。けんちゃんイヤイヤして、はんズボンをはいてくれないとき、ぼくもはんズボンをぬいで、「いっしょにはくのきようしようよ！」っていつたら、ちゃんと一人ではけたもんね。えらかったね。つきはなにができるかな？

けんちゃん、「にーたんちゆうするー」っていつてくれてありがとう。でもね、ぼくおとこのこだから、けんちゃんちゆうできないんだよ。そのかわりに、いつもの「ぎゅー」しようね。

けんちゃん、まいにち「にーたんだいちゆき」っていつてくれてありがとう。ぼくもまいにちおかあさんにいつているからおほえたんだね。けんちゃんにいつてもらうと、ぼくのところがあたたかくなるんだよ。ぼくもけんちゃんが大喜びだよ。

けんちゃん、いっしょに大きくなろうね。いつまでもななかよしこよしのきようだよ。これからもうーつとざーつとよろしくね！

小さなかいじゅうとようせい

庭野 心暖

ぼくは、小さなかいじゅうです。学校からかえってくるとランドセルをほうりなげて、ようふくもほったらかしです。それをかたづけしてくれるのはママようせいです。ようせいは小さなかいじゅうに「ランドセルをかたづけなさい。」「くつ下をせんたくきにいれなさい。」と言いますが、小さなかいじゅうはかたづけません。小さなかいじゅうは、ソファでねっころがってテレビを見てしまいます。そうしてそれを見ておこったようせいは大きなかいじゅうにしんかします。そして家には、おそろしい大きないぬがいますが、おちます。小さなかいじゅうも、大きなドラゴンにへんかします。そしてたたかいがはじまります。たたかいで、大きなかいじゅうがかったので、大きなドラゴンはたいかして、あきらめてべんきょうをはじめます。小さなかいじゅうは、ドリルのこたえをこっそり見ます。そして、おわらせたよって、うそをついてまたあそびはじめます。でも、見たことがなぜかばれたとき、大きなかいじゅうのひっさつワザダブルクロスチョップでドリルが、二つにきれました。つぎに、おもちゃをぜんぶすてられました。小さなかいじゅうは、大きなこえで「ごめんなさい。」とあやまりました。ママは言いました。「べんきょうをさぼることより、おわったとうそをついてあそぶことがだめだよ。」ぼくは、うそはついちゃいけないと思いました。

つぎの日、朝見たらおもちゃがもどっていました。

ごめんねママ。うそついてごめんなさい。もううそはつきません。

小さなかいじゅうより。いつもありがとう。

がんばってね、おかあさん

里 賢信

「おかあさん、はたらかないで。」

ぼくのおかあさんは、四年前からおとうとを生むために、しごとを休んでいました。ぼくが二年生になる四月から、また、おしごとに行くことになり、ぼくは、じどうクラブへかえることになりました。ぼくは、「じどうクラブじゃなくて、今までみたいに、いえへかえりたいな。」と思い、おかあさんに、

「おかあさん、おうちについてよ。」
と、なきながら言うつと、

「おかあさんもがんばるから、けんちゃんもいっしょにがんばろうね。」

と言って、ぎゅつとだきしめてくれました。でも、ぼくはやっぱり、「おかあさんにいえてまっついてほしいな。」という気もちでいっばいでした。

四月になったとき、おかあさんのしごとと、ぼくのじどうクラブがはじまりました。おかあさんは、ぼくより早く早くおきて、ごはんをつくったり、いもうとやおとうとのきがえの手つだいをしたりして、とてもそがしそうです。今までは、あさ学校へ行くとき、おかあさんが、「いってらっしゃい、気をつけてね。」

と、言ってくれていたけど、今は、おかあさんといっしょにいえを出ています。ぼくは、

「おかあさんもがんばってね。」

と言って、学校へ行きます。さいしよはさびしかったけど、

「けんちゃんもがんばって。」

と、おかあさんとハイタッチすると力がわいてきて、がんばることができました。

おかあさんがしごとからかえってくるのは、六時ぐらいなので、ぼくは一人でのかぎをあけて入るようになります。はじめのころはシーンとしたいえに入るのがこわくてどきどきしたけど、なん回かすると、

「ただいま。」

と大きなこえを出しながら、いえに入れるようになりました。

ぼくは、まい日がんばっているおかあさんのために「お手つだいさくせん」を考えました。おとうとに絵本を読んだり、おふろのそうじをしたりしました。

「ありがとう。けんちゃんが手つだってくれて、とつてもたすかったよ。」

と、にこつとわらってくれました。ぼくは、そのえがおを見て、「また、お手つだいをしよう。」と思いました。

おかあさんがはたらきはじめて四か月たちました。ぼくは、じどうクラブでともだちとあそぶ時間がすきになりました。そして、四月に思っていた「おかあさん、はたらかないで。」という気もちがなくなりました。それは、しごとをがんばっているおかあさんがとつてもかっこよくて大すきになったからです。

「おかあさん。これからもおしごとがんばってね。」

ぼくの優しいじいじ

大栗世風

パシツ。

しようぎのこまを盤に置く。ぼくの楽しみな時間だ。相手はいつも大好きな祖父だ。祖父はぼくたちに底ぬけに優しい。

例えば、送り迎え。ぼくのうちは学校が遠い。歩いて一時間はかかる。兄弟三人別々の習い事をしているから、送り迎えの時間もみんなまちまちだ。なのに嫌な顔一つせず毎日来てくれる。ぼくのバスケットが長引いても待っていてくれる。祖父がいてくれると安心だ。母に怒られている時、助け船を出してくれる。祖父が間に入ってくれると、母の怒りも早く収まる。突然の友達との予定や無理なお願ひも、祖父なら聞いてくれる。だから母に見つかからないように、こっそりお願ひをする。

でも優しいだけじゃなくて、危ないことをしたり、約束を守らなかったりすると怒る。すぐ怒る。ぼくは耳が悪い。小さい時から聞こえにくい。父と母は仕事だから、病院には祖父と行く。薬を飲まなかったり、病院からやつてはいけないと言われていたことをしたりすると本気で怒る。でも、ぼくが反省しやすいようにおどけてみせてくれる。少し気まずい頃は、それにのる。祖父はすごい。

それから、祖父は習字の達人だ。何て書いてあるかさっぱり分からない、へびがはったような字を書いている。きつとうまいんだろう。そんなぼくにも分かるのは、ぼくの習字のお手本だ。ぼくは習字を祖父に習っていて、祖父のお手本を見て書くとお手本に書ける。祖母の還暦のお祝いや、ひいはあちゃんの卒寿のお祝ひも、ぼくが習字で「おめでとー」と書いた。みんなすごく喜んでくれた。二人とも今でもかざってくれている。

そして何より楽しい祖父との時間は、やっぱり二人でしようぎをする時。ぼくが小さかった時は手をぬいて負けてくれていた。でもぼくが、しようぎクラブに入って強くなった。すると、ぼくが勝つ日が続いた。その時ぼくは見た。スマホでこっそりしようぎの練習をしているところを。かわいいやつだと思って黙っていることにした。そしてぼくは、対等に戦えるようになってきて、ますます祖父とのしようぎが好きになった。この前の勝負で、王を取ろうと飛車を動かして、パシツとさした。ぼくは、置いたしゅん間、

「あ！ ちよつと待って。」

角にとられることに、気が付いたのだ。

「ダメダメ、もうあかん。」

祖父は待ってくれなかった。前は待ってくれたのに、ぼくが強くなったのかな。今は対戦表を作って勝ち負けを記録している。

そんな祖父に「ありがとう」でいっぱいいだ。遊んでもらったり送り迎えをしてもらったり、当たり前のように思っていた。本当はぼくを大切に思ってくれているからだ。これからは習字をがんばったり約束を守ったり行動で見せる。少してれくさくて言えないけど、お迎えの車で二人になれた時に言おうと思う。

「じいじ、いつもありがとう。」

負けるな姉ちゃん

平田 つぶら

三月、姉ちゃんが進学のため島を出ました。私の住む小さな離島は高校までしかないので、ほとんどの人が高校卒業と同じに島を離れます。だから姉ちゃんも薬剤師の夢をかなえるため県外へ行くことになり、荷物をまとめ、スマホを買ってもらい、海と畑しかない島から、大喜びで出発しました。私も一緒に使っていた机や布団のことで、何百回もケンカして、命令ばかりされていたので早く引越してっと思っていました。でも、姉ちゃんがいなくなると、一人で使うには全てが広すぎるし、姉ちゃんの物であふれていた場所もガラんと空っぽでだんだん淋しくなってきました。二人で集めていた折り紙やシールの箱も一人ではする気もなく、姉ちゃんの好きな曲がラジオから流れた時は聴かせてあげたいとか、居た時は想像もしなかった姉ちゃんのことばかり考えるようになりました。両親は時々電話でちゃんと睡眠とっているか、体に気をつけての話をします。新しい友人や初めての科目、寮生活に雪を見た好奇心で楽しそうな姉ちゃんに私が出した返事をくれません。だから新しい世界で私のことを忘れたのかなと悲

しくもなりました。そのうち姉ちゃんがどんどん元氣のない声になり、『家に帰りたい』と泣いてかかってきた時はビックリしました。「皆が通る道」だからと両親には想定内だったようで、兄たちと笑っています。私はずっと新聞配達を続け貯金したり、夜中まで勉強続けている、姉ちゃんのがんばりをいつも見ていたので姉ちゃんがつらいのはせつなくなりました。そして姉ちゃんが笑って元氣になるよう、家族で姉ちゃんの好きなお菓子や文具品をたくさん送りました。おいしいのを食べて、またがんばればいいさね、でも無理だったら退めて帰って来ていいよの気持ちを入れて。すると小包が届いた頃には、たつぷり泣いて復活したらしく、お菓子の量が少ないとか、気が利かないなの文句の電話がきたのでいつもの姉ちゃんに戻って安心しました。心配して損した気分になったけど、よかつたって心から嬉しくなりました。家族だからどんなことも気にならず、無理したり嫌なことでも悩んでいながら全力で解決のお手伝いをし姉ちゃんを守ります。姉ちゃんの幸せが家族皆の幸せと両親は言います。そして、私の幸せでもありません。側にいても離れていても私は姉ちゃんのことを大好きです。いつだって味方だし、姉ちゃんみたいになりたいと思うようになってきました。成人式には帰ってくるので早く会いたいなあ。負けるな姉ちゃん！

お母さんと歩いた道のり、歩く道のり

橋本 美咲

学区外の私は登校班の集合場所まで少し道のりがあるため、一年生の時からお母さんがいつも一緒に歩いてくれた。一年生の頃は、いつもお母さんと手をつないで、いつもお母さんを見上げて話をしながら歩いた。今では同じ目線で話をしている。あの頃のように手をつなぐのは少し照れくさい。お母さんは、「忘れ物ないん?」「今日は何があるん?」「が毎日の口ぐせだ。だんだん「めんどうくさいなあ。」と思うことが多くなった。学年が大きくなるにつれて、お母さんと歩くことがはずかしく思うようになった。毎朝、「送っていいですか?」「というお母さんに「一人で行く。」とそっけなく出て行くようになった。家を出てふり返ると、お母さんは手をふって見送ってくれていた。私も手をふっていたけど、一日、二日といった間にかふり返らなくなった。お母さんは、私の姿が見えなくなるまで見送ってくれていたのは分かっていたのに、なぜそんなことをしたのか分からない。

「美咲と歩かんようになったら運動不足になるわあ。」と笑っていた。朝からけんかして口もきかなかったこともあった。それでも、雨の日も風の日も暑い日も寒い日もいつもお母さんは一緒に歩いてくれた。そして集合場所から、私の姿が見えなくなるまで見送ってくれて

いたのに。

数日間、私は一人で道のりを歩いた。お母さんと一緒に歩いていたときは、「あーあめんどうくさいなあ。」と思っていたのに一人で歩くとなんだかさみしい気がした。近所のおばさんたちに、「この頃お母さん見ないけどどうしたん?」とすれ違うたびに声をかけられた。そのたびに気持ちがもやもやした。

いつものように、「送っていいですか?」と言うとお母さんに私はうなずいていた。久しぶりにお母さんと道のりを歩いた。なかなか言葉が出なかった。近所のおばさんたちが、「お母さん、久しぶりだねー。一緒によかったね。」と言ってくれた時、私の中のもやもやした気持ちがすっきりした。

こうしてお母さんと歩く道のりもあと数ヶ月。やっぱりさみしい気もする。数十分ほどの道のりだけど、お母さんと一緒に歩いた道のりは本当にうれしかった。お母さんはどう思っていたのか分からないけど、私と同じ気持ちだったらうれしいなと思った。「お母さん、いつもありがとうね。」とつぶやいてみた。お母さんは聞こえなかったのか何も言わなかった。でもほんの少し笑ったような気がした。これからもけんかしたり、きげんが悪くなったりすることもあると思うけど、卒業するまでもう少し、お母さんと歩く道のりを大切にしたいと思つた。

そして今日もお母さんは、集合場所から私の姿が見えなくなるまで見送ってくれる。